

‘Daisy Miller’ における Winterbourne の役割

有 馬 輝 臣

‘Daisy Miller’ において、視点にすえられた Winterbourne の役割など今更論ずるにたりない問題であるかも知れない。しかし、視点にすえられているが故に、かえって我々読者はあまりにも Winterbourne の側に立ってこの短編小説を読みすぎているのではないだろうか。この問題を考えることは、Henry James がこの小説を書こうとした時の初心を究明することにつながると思うのである。

James が、1877年に友人から聞いた話を基にして、1878年の春に ‘Daisy Miller’ を書きはじめたとき、彼は単なる恋愛小説を書こうと思っていたわけではあるまい。未熟な読者が Daisy の Winterbourne に対する愛を見過ぐしてしまうことが往々にしてあるのも、視点にすえられた Winterbourne が、機敏に女心を察するタイプの男性ではなかったからばかりではない。Balzac (1799-1850) が小説によって、19世紀フランスの歴史を *The Human Comedy* の中で描こうとした颯に倣って、James も、他の小説家の目に映りながらも、看過されていた ‘*In International Situation*’ の一つの面を短編で描こうと思っていたに違いない。James の一連の長・短編小説は、19世紀から20世紀にかけてのヨーロッパの歴史とまではいかなかったとしても、ヨーロッパの風俗の一面を捉え得たと言えるのではないであろうか。1878年のこの ‘Daisy Miller’ もそうした風俗小説の一つとみなしてよいであろう。

そもそも、当時の James の関心は ‘A girl like Daisy who had innocently scandalized Rome’¹ を描くことにあった。New York Edition の ‘Daisy

Miller.' に付した 'Preface' の中で、当時、題名に何故 'A Study' と添えたか思い出せず、'they [reasons] may have taken account simply of a certain flatness in my poor little heroine's literal denomination'² と解説しているが、James は、当時の自分の心境をすっかり忘れてしまったようである。以前、他の拙論で述べたように、画家が大作の前に、多くの習作 (étude) を描いて構図を考えたように、James は一つには後の長編の為に〈習作〉として、'Daisy Miller' を手掛けたのであろう。James が絵画から学んだ技巧は、無意識のうちに、彼の血となり肉となっただけに、彼自身が、そのことにかえって後年思い至らなかったに違いない。James は、この小説で、Catherine Sloper、や Isabel Archer のように、人生の試練を経て、大きく成長していく人物を描こうとしたのではない。当時、ヨーロッパにやって来たアメリカ娘が、風俗・習慣の違いによって、ヨーロッパの人々、特にヨーロッパ化したアメリカ人達の蜚蜚を買い、指弾を受け、あまつさえ、ふとした出来事から、一命を失うことさえある現実を見聞し、そのような一つの社会的現象として、Daisy Miller の物語を考えたのである。

アメリカでは、Daisy Miller や Isabel Archer のような女性が生まれつつあったが、先ずは、James は、一見 'a pretty Americal flirt'³ と映る Daisy が、実は、'flirt' ではなく、'the most innocent' な 'young lady'⁴ であったことを、つまりヨーロッパでしばしば非難を受けているアメリカ娘の実像を、アメリカ作家として、言わば、弁護したかったのであろう。'flirt' と見えながら、その実 'innocent' であったことを証明するためには、Daisy と直接関わりのある人物を配さなければならないであろう。その語り手として、James は、Winterbourne を考えたのである。The Spoils of Poynton の Fleda Vetch が視点にすえられることによって、Fleda が当初の作者の予定から大きく逸脱して、事件の当事者として変身して行ったように、Winterbourne も、視点にすえられることによって、単なる傍観者としての語り手から、Daisy の愛の対象としての人物に変身せざるを得なかったのだ

ある。Winterbourne の本来の役割は、Daisy の短い生命 (Daisy という名前の中に、我々は一年草の花の短い命を連想するのである) を見届け、それを読者に話す語り手にあるのであって、Daisy と Winterbourne の恋愛の発展に作者の関心がない以上、Winterbourne をあのような形でしか描けなかった。Winterbourne に課せられた役割は、「ヨーロッパに長居をしすぎたために、新しく生まれつつあったアメリカ娘を正しく理解できなかった」男を演ずることにあつたのである。

Daisy に恋愛感情を抱きながら、風評に災いされて、Daisy および彼女の気持ちを理解出来ず、彼女を死に追いやってしまうのである。‘I was booked to make a mistake.’⁵ という損な役割を最後まで演じ通さなければならないのである。

人は、祖国にいる時、余程のことがない限り、同胞意識を強く感じることは少ないが、外国に行くと、同国人に対しては並々ならぬ親近感を知らず識らず抱くものである。作家になるために、祖国アメリカに早くから見切りをつけて、ヨーロッパに渡った Henry James といえども例外ではなかったであろう。彼の小説の大半の主人公達が、善きにつけ悪しきにつけヨーロッパにやって来たアメリカ人であることを見ても、James にとって、やはり、同国人であるアメリカ人は気になる存在であつたことが窺えよう。Winterbourne が The Trois Couronnes の庭で、Randolph と知合いになつたのも、彼に対する同胞意識であつたし、Daisy に対しても、やはり彼女が ‘an Americal girl’ であつたことも一役買っていたであろう。

しかし、James の主人公達が、おおむねそうであるように、Winterbourne が Daisy に惹かれたのは、彼女が「アメリカ娘」であるばかりでなく、「美しい女性」であつたからであつた。Daisy に対する Winterbourne の最初の強烈な印象は、‘a beautiful young lady’ ということであり、彼の感想は、‘she was strikingly, admirably pretty’⁶ であつた。つまり、Winterbourne は、彼女の美貌に惚れ、接近するのである。第一部における仕

掛人は、Daisy ではなく、Winterbourne なのであり、ヨーロッパの風習に逆らった行動を敢えてとるのも、Winterbourne なのである。自らが Geneva の習慣に逆らった行動をとっていることを、Winterbourne は Vevey では常に意識しており、例えば、次のように考えている。

In Geneva, as he had been perfectly aware, a young man was not at liberty to speak to a young unmarried lady...⁷

むしろ、見ず知らずの青年に声をかけられて警戒しているのは、Daisy の方であり、最初、話しをするときに、相手の顔を正視しないのは、

If she looked another way when he spoke to her, and seemed not particularly to hear him, this was simply her habit, her manner.⁸

と Winterbourne は判断しているが、彼女の母親と同じ様に⁹、本来は案外「内気な」娘なのかも知れない。実際、知り合ってしまったら、話相手の顔から、視線を逸さず話をしているのである。一見、‘a designing, an audacious, an unscrupulous young person’¹⁰ に見えながら、その裏 Winterbourne への「切ない恋心」を胸に秘めて口に出せず、死の床でやっと、本心を覗かせるいじらしい女性なのである。

Geneva に長く住みすぎて、現在のアメリカの風習に馴染まなくなってしまうと意識しながらも、Daisy の Schenectady や New York での無軌道に見える男性との自由な交際話を聞かされて、Daisy を ‘inconduite’ ‘a pretty American flirt’¹¹ と考え、その上で猶かつ、Daisy に接近しようと思うのである。美しいが故に、Winterbourne にとって Daisy は Vevey での無聊を慰める、気になる存在となり、一応、‘a pretty American flirt’ と判断したものの、Daisy を見定めたいという好奇心が働いたのであろう。Daisy に一目惚れしながらも、Winterbourne が、Daisy に百パーセント夢中になれなかったのも、Daisy が ‘flirt’ ではないかという危機があったからではあ

ろうが、次の彼の言葉には、‘flirt’ なら ‘flirt’ で、Daisy 相手に遊んでやろうという魂胆が覗いているようで、Rome で Giovannelli を非難する資格が果たして Winterbourne にあるだろうかと訝かしがらせる冷たい打算が見える思いがするのである。¹²

...; he wondered what were the regular conditions and limitations of one's intercourse with a pretty American flirt.¹³

Eugenio が分際を弁えない無礼な従僕として登場しているが、従僕ふぜいに「口をさしはさませるほどに」Winterbourne の側に ‘bold’ などころがあったことも、我々読者は認識しなければならないであろう。お気に入りのお婿のたつての願を断って、Daisy に会おうとしない Mrs. Costello は、Daisy だけでなく、Winterbourne をも、行為によってきつく窘めているのである。

Daisy に紹介されることを強く拒む叔母に逆らってまでも、Winterbourne は Daisy との交際を深めようと、約束どおり、Daisy と二人きりで、Chateau de Chillon 行きを敢行するが、想像力の逞しい Winterbourne はこの遠出にロマンチックなアバンチュールを期待して¹⁴、最初のうちは、一見、そうした様子を見せない Daisy に失望さえしている程である。Chateau de Chillon へのこの遠出を諷け落ちに譬えているほどロマンチックな気分になっている Winterbourne であるが、彼は一両日中には Daisy と別れて Geneva へ帰らねばならず、船中で “What on earth are you so grave about?”... “you look as if you were taking me to a funeral ...”¹⁵ と Daisy に詰られるのは、恐らく、折角知り合ったこの素敵な女性と別れなければならないことを考えて、憂鬱になったのであろう。この時の Winterbourne には Rome で Daisy と再会できる当ては未だなかった筈だからである。Chateau de Chillon に纏わる伝説にほとんど興味が無いにしても、知識人の Winterbourne に心酔し、淡い恋心さえ抱き始めている

Daisy にとって、Winterbourne が明日にも Geneva へ帰るという知らせは、晴天の霹靂であつたろうし、“I think you’re horrid!”¹⁶ という彼女の言葉も充分領けるであろう。とすれば、同国人の美しい娘に、ただならぬ興味を持ち、惚れたとしても、Winterbourne にとって Daisy は、Vevey での無聊を慰めるだけの存在でしかなかったと考えられても仕方がないであろう¹⁷。噂どおり、Geneva に、‘a charmer’ がいるとすれば、恐らく Daisy とは性格的には対照的な女性であつたに違いない¹⁸。Daisy は、James の描く多くのヒロイン達とは、「美しい」という点で共通点を持つものの、知的好奇心に欠けるという点では、あまり例を見ないヒロインの一人であろう。彼女は、Mrs. Costello や Winterbourne も言うように、‘common’ で ‘uncultivated’ で ‘wild’ である。父親の勧めで、(ということは、父親にしてみれば娘に教養を身につけさせるためであろうが)、はるばるヨーロッパにやって来てはいるものの、漫然と旅行を楽しんでいるにすぎない。アメリカでそうであつたように、ヨーロッパに来ては社交の好きな Daisy は、男性との交際を楽しんでいる。イギリスの上流家庭の子弟が教育の仕上げとして受けるグランド・ツアーではない。Chateau de Chillon でも、この城に纏わる史実などに向き興味を示さないし、ローマにおいても、母親の言葉によれば、多くの紳士達との交際を楽しんでいるのである。Isabel のように ‘to see the world’ という熱意もなければ、なにかを学び取ろうとする姿勢もない。ただ、現在の瞬間瞬間を享受しているにすぎない。一言で言えば、Mrs. Costello をして舌を巻かせたほどの高価でファッションブルな服装をしている利発で可愛い美人と言えらう。どこで身につけたのか分からない彼女の服装に対する趣味は、恐らくは、Miller 家の財力を表すものであろう。こうした要素は、ある程度 *The American* の Christopher Newman にも言えることだが、まさしく当時の「アメリカ娘」の一つの典型なのである。

Vevey では、叔母の批評よりも、自らの実感に頼り、あれ程積極的であつた Winterbourne が、Rome では、孤疑逡巡する Hamlet に変貌して

いる。時間を置いたが故に熱が冷めたわけではない。Chateau de Chillon での Daisy の態度から、Winterbourne の方が、逸る心を抑えながら、Daisy 会いたさに Rome へ来たのである。Vevey では、ある意味で、興味本位でしかなかった Winterbourne の感情が、Rome では恋に変わってしまっていたと言ってもよいかも知れない。それだけに彼の方でも、自分を待たせている Daisy を期待するのである¹⁹。

しかし、Rome での Daisy の評判は Vevey 以上に芳しくなく、'some third-rate Italians' と浮名を流しているとあっては、Winterbourne といえども自尊心が許さず、早々と Daisy に会いに行く気がしなかったであろう。Daisy は Vevey で Winterbourne に話したように、アメリカでは男性との自由な交際を楽しんだように、Rome でも、相手に下心がある無しに関わらず、親切にしてくれる 'half a dozen' の男性と自由につき合っていただけのことであろう²⁰。Daisy は言葉とは裏腹に、恐らく、Winterbourne が期待したように、彼の到着を一日千秋の思いで待たせていたであろうし、それだけに Winterbourne の Rome への到着を先刻承知していたであろう。自らの存在と意志を無視されるとき Daisy は一番傷つくのである。

Winterbourne は Daisy に興味以上の感情を抱くことによって、辛うじて、ヨーロッパ化したアメリカ人と Daisy 一家との中間に位置しているだけにすぎない。彼自身も再三反省しているように、ややもすれば、ヨーロッパに長居し過ぎているために、ヨーロッパ化したアメリカ人の立場から、Daisy を見がちなのである。彼が、Daisy に対して、結局、積極的な態度に出る衝動を鈍らせるのは、心の底で Daisy をやはり、'a pretty American flirt', 'a very light young person' と看做しているからである。Mrs. Costello や Mrs. Walker はいざ知らず、Winterbourne にさえ、そう判断させ、愛しながらも、結局は Daisy を「殺して」しまうところに、この小説のテーマがあるのである。Winterbourne の狐疑逡巡が、折角、手中に収めていた Daisy を逃してしまうばかりか、死に追いやってしまうのである。

Winterbourne を慕う Daisy とて、自らを疑う Winterbourne の胸に飛び込んでいけるだろうか。自尊心が高く、勝気な Daisy としては、やむを得ないローマでの行動であろう。ピンチオ公園での Giovanelli との一件にしても、Daisy の性格からも²¹既に約束をしてしまっている Daisy としては、むげに Giovanelli を袖にしてまで、Winterbourne を選ぶことは出来なかったであろう。

ましてや、自由の国、アメリカで育ってきた Daisy にとって、自分の行動に他人から口をさしはさまれることを潔しとはしなかった。つとに Vevey においても Daisy は、最終的に Winterbourne の勧めに従うことになっても、最初は、素直に従ってはいない²²。Rome で Giovanelli との交際を Winterbourne から婉曲に詰られると、Daisy は “I don't like the way you say that,”... “It's too imperious.”... “I have never allowed a gentleman to dictate to me, or to interfere with anything I do.”²³ とはっきり逆襲しているのである。“when you deal with natives you must go by the custom of the place....”²⁴ と考える Winterbourne に対して、Daisy は自分の行動が ‘the custom’ になるべきだと考える自由の子なのである²⁵。一見、手に負えない腕白者の Randolph も、型に填められるのを嫌う独立不羈を尊ぶアメリカ精神を体現していると見るのが妥当であろう。Daisy や Randolph は、他人に掣肘されない自由な生き方を選ぶが、その生き方がヨーロッパ側の人達には、理解できない無法さと型破りさを感じさせたのであろう。

そして、階級制度の確立していた当時のヨーロッパにあっては、‘count’ や ‘marchese’ や ‘cavaliere avvocato’ や ‘courier’ や ‘Baker, Chandler, Miller’ といった肩書が意味を持ったにしても、誰をも平等に扱う Daisy 一家にとっては、恐らく Winterbourne と Giovanelli と、Eugenio との間には、なんの区別もなく、彼らは等しく ‘a gentleman’ であったであろう。Vevey で、Winterbourne と、あれ程自由に交際した Daisy が、Rome で

も（特定の）男性と自由に交際して悪いはずはない、と考えてもなんの不思議もない。Vevey での経緯はともかくとして、Rome では、Giovanelli は Daisy にとって「先客」であった。恐らく、女性を扱うことにかけては如才無い Giovanelli に、常に先を越されて、Winterbourne は後手後手に廻り、Daisy との仲を深めることが出来ないばかりか、結局は、月夜の Colosseum の場面で Daisy を ‘a very light young person’ と判断してしまい、それを肌で感じた Daisy が、自暴自棄になってしまうのである。“Don’t forget Eugenio’s pills”²⁶ との Winterbourne の忠告に対して、“I don’t care,”..., “whether I have Roman fever or not!”²⁷ という Daisy の叫びは、「あなたに嫌われているなら、もう死んでも構わない」ということを意味し、Daisy は、死によって Winterbourne に自らの愛と潔白を証明したようなものなのである。“Quick, quick,”... “if we get in by midnight we are quite safe.”²⁸ と、Giovanelli は言っている。Daisy は果たして、Eugenio の薬を飲んだのであろうか。やり切れない思いの Daisy が、服用を拒んだと考えてもよいのではないだろうか。だからこそ「死の床」で、母に Winterbourne へ「身の潔白」を伝えて欲しいと再三頼んだのである。彼に解ってもらえる手立ては、Daisy にはこれしかなかったのである。Winterbourne とても、一瞬の怒りで、口汚く罵ったものの、Daisy を本当にどうでもよいとは思っていない。馬車で Daisy を送り届ける Giovanelli を “the fortunate Italian”²⁹ と呼び、Colosseum の一件を口外しないのもその現れであろう。Winterbourne がずっと独身でいるのは、死を以て身の潔白を証明した Daisy への罪滅ぼしであるのかも知れない。

こう考えると、Winterbourne のこの小説での役割は、視点に据えられることによって、辛うじて、主人公の役割を与えられているものの、飽くまでも、事件の語り手でしかないのである。彼が Daisy の本質に迫ろうとすればするほど、必要以上に、形（ナリ）振り構わず、Daisy に接近しなければならない。見方によっては、Giovanelli 同様、Winterbourne 自身が ‘a

spurious gentleman³⁰ と映るのも、語り手としての Winterbourne に課せられた損な役割なのである。Winterbourne も Christopher Newman と同じ様に、Daisy との邂逅と死別によってアメリカ事情を悟りはするが、作者の目的は、再三指摘するように、二人の恋愛とその挫折にあるのではなく、アメリカ娘の一つの姿を、読者に理解させることにあったのである。一見、蓮っ葉でありながら、その実、純真無垢な Daisy の姿を、Daisy に思いを寄せた一人として、Winterbourne を通じて James は世界の人々に訴えているのである。

Notes

- 1 Edward Wagenknecht, *The Tales of Henry James* (New York: Fredrick Ungar Publishing Co., 1984) p.13
- 2 *The Novels and Tales of Henry James*, Vol. XVIII (New York: Charles Scribner's Sons, 1909), p. vi
- 3 Leon Edel (ed.), *The Complete Tales of Henry James*, 4, 1876-1882 (London: Rubpert Hart-Davis, 1962) p.151
- 4 *Ibid.* p.205
- 5 *Ibid.* p.206
- 6 *Ibid.* p.144
- 7 *Ibid.* p.145
- 8 *Ibid.* p.146
- 9 She's right down timid. *Ibid.* p.161
- 10 *Ibid.* p.151
- 11 *Ibid.* p.151
- 12 Winterbourne は Giovanelli の "far-stretching intentions" (p.181) を云々するが、Winterbourne が、Mrs Miller に初めて会ったときに、夫人を懐柔しようと考えた Winterbourne に、我々読者は "deep" な面を見るのである。"...he said to himself that she [Mrs Miller] was a simple, easily managed person, and that a few deferential protestations would take the edge from her displeasure." p.163
- 13 *Ibid.* p.151 以前、あるアメリカ人教師が、Winterbourne を "a fake" ときめつけたことがあった。Winterbourne の側に立ちすぎていた当時の筆者は、その言葉にショックを受けたが、彼にそう言わしめる要素が、確かに Winterbourne に

あることも事実であろう。Giovannelli からすれば、正直な話、Winterbourne といえども、彼と同様に Daisy に言い寄り巻き連の一人にすぎないであろう。だからこそ、Mrs. Walker はピンチオ公園で Daisy の説得に失敗した後、Winterbourne を Daisy から引き離そうとして、馬車に乗せたのである。世間の目からすれば、Winterbourne の行為も Giovannelli 同様、みっともないものなのである。しかし、Daisy を描くためには、James は敢えて、Winterbourne をあのように描かなければならなかったことを読者は理解する必要があるであろう。

- 14 ...he felt as if there were something romantic going forward.... To the young man himself their little excursion was so much of an escapade—an adventure—that, even allowing for her habitual sense of freedom, he had some expectation of seeing her regard it in the same way. p.167

15 *Ibid.* p.168

16 *Ibid.* p.170

- 17 Winterbourne には、engagements をすっぽかしてまでも Daisy のそばにいて、ヨーロッパ旅行を続けるつもりはないのである。

- 18 “a charmer in Geneva” に関しては、この小説が Winterbourne の視点から 9 分 9 厘描かれながらも、真偽のほどは巧みに隠されている。恐らく Winterbourne の意識の中では、Daisy と “a charmer in Geneva” を常に比較して天秤にかけているのではないだろうか。James がこうした点を完全に省略しているのは、この小説が飽くまでも、恋愛小説ではなく、風俗小説であるからであろう。

- 19 the image of a very pretty girl looking out of an old Roman window and asking herself urgently when Mr Winterbourne would arrive. (pp.172-3)

- 20 Mrs. Miller も、Daisy の男友達に紹介されるのは苦手としても、Daisy が多くの “gentlemen” と知り合うのをむしろ喜んでいいる。ちなみに、夫人は、“...Of course, it's a great deal pleasanter for a young lady if she knows plenty of gentlemen.” (p.175) とも言っているのであり、つとに Vevey で “...this was a very different type of maternity from that of the vigilant matrons who massed themselves in the forefront of social intercourse in the dark old city at the other end of the lake.” (p.164) と Winterbourne に言わせているのである。

- 21 her innocent-looking indifference and her apparently inexhaustible good humour. (p.193)

- 22 例えば、The Trois Couronnes の庭で、初対面のときに、次のような記述がある。Then he asked her if she would not be more comfortable in sitting upon the bench which he had just quitted. She answered that she liked standing up and walking about; but she presently sat down. (p.147)

23 *Ibid.* p.180

24 *Ibid.* p.191

25 “It may be enchanting, dear child, but it is not the custom here,” urged Mrs Walker, leaning forward in her victoria with her hands devoutly clasped.

“Well, it ought to be [the custom], then!” said Daisy. (p.183)

26 *Ibid.* p.204

27 *Ibid.* p.204

28 *Ibid.* p.181

29 *Ibid.* p.204

30 *Ibid.* p.181

1991. 4. 30 受理

Synopsis

The Role of Winterbourne in 'Daisy Miller'

Teruomi Arima

What role does Winterbourne play in 'Daisy Miller'? Investigating this question clarifies the intention of the author at the time when he wrote this charming short story.

When Henry James started his literary career, he had to search for his originality as a writer so as to leave his name behind in the history of literary world. As a result, he cultivated (and, in the long run, elaborated on) the technique called "point of view". On the other hand as a cosmopolitan he found around him the interesting theme of International Situation. He tried to describe as many tragic and comic aspects of International Situation as possible to illustrate what it was like. At the "fin de siècle" quite a new and different type of young girls were emerging in the New World. These girls came to the Old World sometimes for pleasure or sight-seeing, sometimes on a Grand Tour, sometimes for husband-hunting. But unfortunately Europeans, especially Europeanized Americans, failed to understand these American girls, driving them into isolation and, what is worse, sometimes into death.

Around 1878 Henry James wanted Europeans to understand these new American girls. In 'Daisy Miller' did he not intend to write a love story between Daisy and Winterbourne, but to write about

Daisy through Winterbourne's eyes.

Once setting Winterbourne as the point-of-view character, James had to get the hero involved in Daisy's world. And the best way to get him involved in the event was to let him be either her confidante or one of her boyfriends. Being her boyfriend he could keep company with her and observe her more carefully than other outsiders. Being her admirer he could better appreciate her than other Europeanized Americans. But, when all is said and done, it is HE who causes her death, because he, after all, fails to fully understand her innocence before her death. At the sacrifice of her life he came to understand that she was not a pretty American flirt but an innocent girl. He could have saved Daisy if he had fully appreciated her. He could not be her 'sweetheart.' He is only a subsidiary character, a reporter necessary for the development of the plot, without playing out the part of her sweetheart. He is destined to repent of what he has done to her, failing to understand her and respond to her affection.